DX計画

DX Plan

Go Forward!

豊和建設株式会社

目次

- 経営ビジョン
  - デジタル技術による社会環境変化について
  - DXビジョン
    - デジタル活用の方向性
- DX戦略
  - DX推進体制
    - デジタル人材の育成・確保
  - 環境整備
    - 投資計画
- 成果指標

経営ビジョン

我社は「災害に強い会社」、「人・環境に優しい会社」、「提案力・技術力の高い会社」、「働く人が希望を持てる会社」を目標として、たゆまぬ挑戦を続け、困難なハードルを乗り越えていきます

デジタル技術による社会環境変化について

いま建設業界は、人手不足・長時間労働・資材高騰・異常気象といった難題に加え、サイバーセキュリティ強化や脱炭素・ペーパーレス化への対応が急務となっています。こうした環境変化を単なるリスクではなく成長の機会と捉え、積極的に取り入れて参りたいと考えます。

経営ビジョン　DXビジョン

社会環境の変化

デジタル活用の方向性

デジタル活用は 三段階で推進。

フェーズ1（2024年度）

クラウドで本社業務を自動化・最適化し、データ統合を実現

フェーズ2（2025年度）

全社員がDXツールを日常化しデータドリブン文化を定着

フェーズ3（2026年度）

現場主導のシチズン開発を促進し生産性と働き方を革新

DXビジョン

経営ビジョンの実現に向けてデジタル技術を活用し、「働き方改革」として社員全員にとって働きやすい職場環境づくりを進め、労働生産性向上を実現します。そして、お客さま・社員・社会にとって価値ある取組、サービスの実現を目指していきます。

ＤＸ戦略

クラウドで本社業務を自動化・最適化し、データ統合を実現

フェーズ1（2024年度）

紙をやめてデータを【集める】

見積→受注→発注→経費精算→請求までをオンラインでつなげ、スマホからも操作できるようにして「紙＆二重入力ゼロ」を実現。集まったデータを1か所（データレイク）にためて、後で分析できる状態にする。

具体施策

- 全体最適の業務BPM(Business Process Model)図を描き、ムダと紙を可視化
- 各工程をつなぐクラウドERP(業務統合システム)・ワークフローを段階導入（スケジュール化）
- 申請書や請求書をスマホ撮影→自動OCRで即登録

DXキーワード

SaaS統合／RPA／API連携／ペーパーレス／データレイク

ＤＸ戦略

全社員がDXツールを日常化しデータドリブン文化を定着

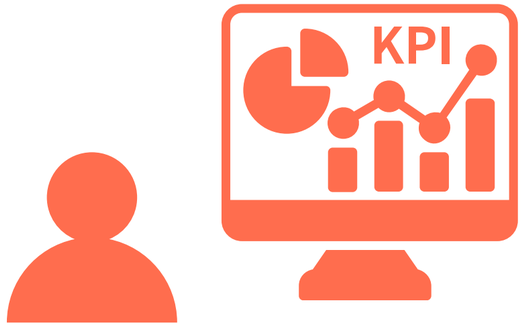
フェーズ2（2025年度）

【見る】デジタルを当たり前にする

現場・事務すべての社員が「スマホやPCで入力→すぐ反映される」体験を重ね、便利さを実感。
データを見ながら判断するデータドリブン文化を育て、現場から改善アイデアが出る土壌をつくる。

具体施策

- 利用マニュアル＋30秒動画で“いつ・どこで・何をタップ”まで示す
- DX推進チームが現場を巡回し、アイデアをノーコードツールで即プロトタイプ
- 全員の画面にリアルタイムKPIダッシュボードを常設し、「数値で会話」(データドリブン文化)を定着



DXキーワード　モバイルファースト／データドリブン文化／ノーコード／チャットボットFAQ／ダッシュボードKPI

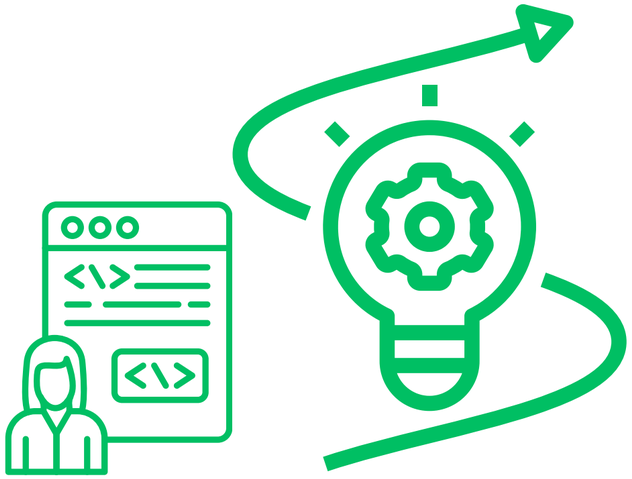
ＤＸ戦略

現場主導のシチズン開発を促進し生産性と働き方を革新

フェーズ3（2026年度）

【活かす】現場がDXを回す

現場の声を経営まで直送し、ローコード／IoT／AIなどを使った改善を高速サイクルで実施。工事書類の集中作成やICT施工で生産性を大幅アップし、「データが仕事をラクにする」を体感できる会社へ。



具体施策

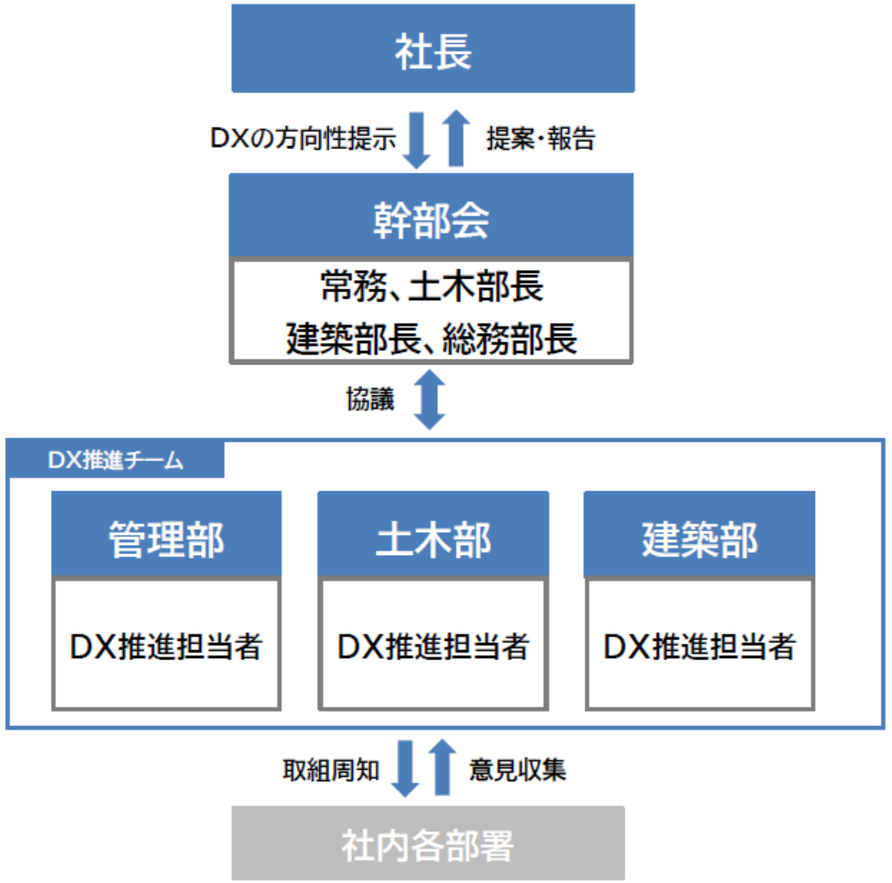
- 土木管理事務機能：本社で書類作成を一括、現場は入力最小化
- アイデア→PoC→本番のアジャイルボードを常設し、月1でデモ会
- 優れた改善案と成果を表彰＋社内SNS共有し、成功事例を水平展開

DXキーワード

シチズンデベロッパー／ローコード／ハイパーオートメーション／IoT・ICT施工／AI予測分析

ＤＸ戦略　ＤＸ推進体制

- DX推進プロジェクトを設置し、代表取締役社長を実務執行統括責任者とします
- 各部門からDX推進担当者を任命、DX推進チームを結成し、当チームが中心となってDX戦略の実行を進めていきます



役割分担

役割	説明
代表取締役社長	・プロジェクトの実務執行総括責任者 ・DXの方向性(ビジョンや戦略)の提示 ・DX推進担当者とともにプロジェクトの課題・リスクへの対応方針検討
DX推進担当者 (DX推進チーム)	・プロジェクトの実務担当者 ・DX戦略の具体的な実行計画策定 ・取組施策実行推進 ・従業員の意見取りまとめ、新たな取組施策検討・提案 ・プロジェクト取組内容の社内周知
幹部会	・プロジェクトの全体管理を担当 ・代表取締役社長とDX推進担当者の間に立って両者の円滑なコミュニケーションをサポート

コミュニケーション方針

会議	詳細
DX推進チーム定例会	・隔週に1回程度開催 ・DX戦略の実行計画策定、進捗・課題・成果等の確認、従業員の意見集約等を実施
幹部会への報告・相談	・1か月に1回程度開催 ・DX推進チームでの議論内容を幹部会へ報告・相談
社長への報告・提案	・2か月に1回程度開催 ・DX推進チームと幹部会での議論内容を幹部会から代表取締役社長へ報告、必要な場合は提案を実施

ＤＸ戦略　ＤＸ推進体制

デジタル人材の育成・確保

【生成AI研修】

1. 基礎理解（人材育成）： 全社員が同じ動画教材と実演で生成AIの概要を学び、最低限の操作スキルを習得する。
2. 業務適用設計（データ利活用）： 主要業務を洗い出し、どのデータを使って何を効率化・高度化できるかを一覧化して優先度を決定する。
3. 利用指針策定（ガバナンス）： 個人情報・機密情報・著作権の取り扱いを盛り込んだ「社内生成AIガイドライン（案）」を作成し、取締役会で承認する。
4. 小規模PoCと効果測定（進捗・効果確認）： 部門代表が小さな試行を実施し、時間短縮・誤入力削減などの効果を数値で把握。四半期ごとにKPI報告し、次年度の展開計画に反映する。

この４ステップで 人材育成・データ利活用・ガバナンス・PDCA の全要件を網羅し、生成AI活用を安全かつ段階的に全社へ広げる体制を確立します。

ＤＸ戦略　環境整備

投資計画

2026年度末までに 総額2,000万円 を上限として段階的に投資する。
各フェーズ完了時に振り返りを行い、計画を最適化しながら予算を執行する。

フェーズ	主な投資内容	予算上限 (万円)
1 （2024年度）	クラウドERP初期導入・タブレット試験配備	400
2 （2025年度）	データレイク構築・追加デバイス・研修	900
3 （2026年度）	AI・IoT拡張、セキュリティ高度化	700
合計		**2,000**

成果指標

KPI は毎期の経営会議でレビューし、必要なら目標をチューニングする

フェーズ	重点 KPI	測定データ & 取り方	計算方法・確認タイミング	担当 & 報告先
1 （2024年度）	**紙書類削減率** ②	複合機の月次プリント枚数レポート（全拠点で自動メール送信設定）	①2020〜2023年度平均枚数を「基準値」として保存 ②毎月末に「今月枚数 ÷ 基準値」で進捗%を算出 ③グラフ化して工務 - DX推進 Teamsに掲示	工務（複合機管理者）→毎月のISO会議で共有
2 （2025年度）	**スマホ入力定着率** ③	クラウドERP／ワークフローの「モバイル打刻ログ」（CSVで自動エクスポート）	①月末に「モバイル入力件数 ÷ 延べ作業日数」で算出 ②部門別ランキングも同時に作成し、掲示板に貼り出す	DX推進チーム（1〜3名）→ 部門長ミーティング
3 （2026年度）	**シチズン開発アプリ数** ②	社内ローコード環境（Power Apps 等）の“公開アプリ数”メータ	①四半期ごとに公開アプリ数を記録 ②内容が重複するものは1本に統合し、累計を更新	DX推進チーム→ 経営会議／社内SNSで発表
全期間	**売上総利益率** ①	データ源：クラウドERP（会計モジュール）に自動集計される - 売上高（Net Sales） - 売上原価（Cost of Sales） 取り方：月末締後、ERPから損益計算書CSV をワンクリック出力	計算式： (売上高 − 売上原価) ÷ 売上高 × 100% タイミング： - 月次：経理締め翌々月10日までに速報値を算出し Slack/Teams に共有 - 四半期ごと：経営会議で前年同期比を報告 ▼ “＋5pt” 目標との差分を確認	集計：経理責任者（総務兼任でも可） 確認：DX推進チームがダッシュボード化し誤差チェック 報告先：社長・役員会（四半期）／全社会議（年次）

①企業価値創造にかかる指標・②DX戦略実施により生じた効果を評価する指標・③DX戦略に定められた計画の進捗を評価する指標

用語集

シチズン開発
IT 専門職ではない現場・業務担当者（＝シチズンデベロッパー）が、ノーコード／ローコードツールを使って自ら業務アプリや自動化ロボットを開発・改善する取り組み を指します。

クラウドERP（Enterprise Resource Planning）
会社の“ヒト・モノ・カネ・情報”を、クラウド上でひとつに束ねる業務統合システム
（例：販売・購買・在庫・経理・給与などを 1 つのサービスで管理）企業全体の操作盤をオンライン化すること。DXの第一歩として「紙・Excelバラバラ問題」を解消し、データドリブン経営と働き方改革を同時に進められるキーソリューション。

データドリブン
経験や勘に頼るのではなく、データに基づいて意思決定を行うことです。具体的には、売上データ、顧客データ、Webサイトのアクセスログなど、様々なデータを収集・分析し、その結果を基に戦略を立てたり、業務を改善したりすること

PoC (Proof of Concept)
新しいアイデアや技術、方法論などが実際に機能するかどうかを検証するための実証実験

用語集

SaaS (Software as a Service)
インターネット経由でソフトウェアの機能を提供するクラウドサービスのこと

業務BPM（ビジネスプロセスモデリング）
企業の業務プロセスを図で可視化し、分析、改善していく手法

RPA (Robotic Process Automation)
ソフトウェアロボット（ソフトウェアロボット）を利用して、定型的なパソコン業務を自動化するシステムや概念

API連携
異なるアプリケーションやシステム間でデータや機能を共有するための仕組み

アジャイル
計画からテストまでの工程を小さなサイクルで繰り返し、柔軟に開発を進める手法。
近年では、開発だけでなく、ビジネスや組織運営など、変化の激しい状況に柔軟に対応する考え方や手法全般